



Making of ManHunt

メイキング・オブ・マンハント

姫田伸也 (日本側ラインプロデューサー)

❖ 難航したロケ地探し

大阪と並んで『マンハント』の主要な舞台となるのは、牧場と天神製薬研究開発センターです。クランクインまでわずか2カ月余りの2016年4月に僕が参加した時点では、牧場のロケ地は熊本県に決まっていたのですが、スタッフを連れて現地へ行こうとした矢先、震災に見舞われました。その後、中国地方の各地をあたり、ようやく見つかったのが岡山県の^{ひるぜん}轟山高原です。天神製薬研究開発センターのロケーションは、どこのスタジオを見せても「狭すぎる」と監督に言われました。中国のような広いスタジオは日本にはないので、困りました。運送会社の倉庫などをあちこち探した末に、岡山市近郊の倉庫に決まり、ホッとしました。

❖ 香港スタイルの映画製作

製作母体のメディアアジアは香港の会社なので、香港スタイルで現場が進みました。予算内に収まるようにスケジュールを組み計画的に進める日本のやり方とは違って、現場で台本を変更し、即興で新しい要素を加えるので経費がどんどん膨らみ、予算の管理が難しくなる恐れがあります。そのことを、以前、香港映画『新宿インシデント』のラインプロデューサーを務めた経験から学んでいたのも、まずは経理体制を強固にしなくてはと、映画の製作経理専門のパジェットコントロールさんをお願いして、定期的に経費のレポートを出してもらうことにしました。また、根本的なやり方や慣習が違うので、たとえば道路での撮影には道路使用許可が必要なることを理解してもらうのに苦労したり……。スタッフを集める際も、そんな香港スタイルに対応できる人を選びました。

❖ キャスティング

キャストは、基本的にキャストディレクターの杉野剛さんに候補を挙げてもらいました。竹中直人さんと斎藤工さんの特別出演は、『新宿インシデント』からの縁で実現しました。実は斎藤さんの役は、最初なかったシーンがあとで追加されて生まれた、新しいキャラクターなんです。

❖ 唯一の日本人脚本家

脚本に関しては、日本からも誰か加えてほしいと言われ、チェン・カイコー監督の『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎』にも参加されている江

良至さんを紹介しました。毎日、変更された台本を江良さんに送っては徹夜で直してもらい、キャストに配ることになりました。

❖ ジョン・ウー監督の魅力

牧場で撮影中のある日、軽トラックの荷台に設置されていた簡易トイレに監督が入っているとは知らず、製作部が車を運転して移動させました。周囲が「中に監督がいる!」と気づいてハラハラしながら見守る中、車がやっと止まると、監督はトイレから出てニコッと笑い、「ハイイ」と手を振ってくれたので、大爆笑となりました。監督は本当にチャーミングな人で、常に現場で良い雰囲気を作ってくれました。

❖ スタッフ総勢200人!

スタッフは日本から約150人、香港・中国・台湾から50人近く参加しました。撮影は毎日午後6時から7時頃には終わるので、スタッフ同士で飲みに行き、仲良くなれたのは、すごく良かったと思います。寝る暇もないような日本映画の地方ロケとは違って、なごやかなムードでゆったりと撮影ができて、そういう意味では、豊かな現場でした。

❖ 健さんへのオマージュ

美術監督の種田陽平さんは、一番長くこの映画に携わり、監督から絶対的に信頼されていました。ラストシーンの舞台が駅になったのは種田さんのアイデアです。当初予定していたエンディングの撮影が無理になり、監督が高倉健さん主演の『駅／STATION』を大好きなことから、「健さんと言えば駅だ!」と。オープニングの居酒屋のシーンも健さんへのオマージュになっていて、「おかみさん」の衣装は、『駅／STATION』の倍賞千恵子さんの写真を参考にしていました。

❖ 半年近い撮影期間

2016年6月上旬にクランクインし、8月末にクランクアップ予定でしたが、結局、2週間くらいの一時中断を挟んで、11月末まで掛かりました。でも、変更の連続にもかかわらず、どこを切り取ってもジョン・ウー監督にしか撮れない作品となり、感動でした。僕自身『男たちの挽歌』などを観て台ったので、憧れの監督の作品に参加できたことは大きな喜びでした。(謙)